The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	一九四二年九月-一二月 <思想戦>の中の「花火」
Author(s)	野口, 尚志
Citation	太宰治スタディーズ. 2016, 6, p. 16-19
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/57174
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【戦局】

▼9月

・12日、ガダルカナル島第一次攻撃

▼10月

・24日、ガダルカナル島第二次攻撃

・26日、南太平洋海戦

▼11月

・14日、第三次ソロモン海戦

▼12月

・8日、ニューギニアのパサブアの日本軍玉砕

・31日、大本営、ガダルカナル島撤退決定

一九四二年九月―十二月　〈思想戦〉の中の「花火」／野口尚志

前年十二月八日の開戦から一年を迎えるこの時期を象徴する出来事としては、「文學界」九、十月号掲載の「近代の超克」特集と、結成されたばかりの日本文学報国会が主催した〈大東亜文学者会議〉の第一回大会の開催ということになるだろう。

新聞には〈思想戦〉という言葉が踊っている。文学に関わる例として、「大東亜戦争一周年　文化の必勝態勢座談会」に日本文学報国会常務理事の肩書で出席した中村武羅夫の発言を引いておこう（「読売新聞」一二・二）。

今まで発展して来た近代文学の方向もその質も、かなり混り気のあるもので、日本文学としてどうも真髄から本物であるとはいひにくい。大東亜戦争の開戦によつて新たに認識され、はつきり体得された日本精神に基いた日本文学を建設し、創造して行かなければならぬ。米英的なものに多く指導された過去の近代文化を否定して、新たに自覚した日本精神に結び付いた文学を創造して行かなければならぬ。その日本精神に基いた文学を拡大して行くことが、アジアを指導する一つの根本的な大綱になるべきださういふ風に考へてゐる。

〈西欧（米英）の精神〉対〈日本精神〉。「朝日新聞」十二月十九日掲載の「思想戦研究所」設立の記事の見出しに言わせれば、「〝姿なき敵〟の撃滅へ」。これを国外での戦争に対して国内での戦いに見立て、総力戦の一角を占めるものとして位置づけているわけである。

亀井勝一郎の「奴隷の平和よりも王者の戦争を！」（「現代精神に関する覚書」）という悪名高い一文が知られる「近代の超克」特集もその一つの表れであろう。戦後に小田切秀雄は、「軍国主義支配体制の「総力戦」の有機的な一部分たる「思想戦」の一翼」であったと批判する（「「近代の超克」論について」、「文学」一九五八・四）。一方で、「戦争とファシズムのイデオロギーに荷担したという通説にそぐわない特集全体の四分五裂ぶり」という評もある（藤森清「〈近代の超克〉の位相」、『時代別日本文学史事典現代編』一九九七・五、

【社会】
▼9月
・大東亜省設置の閣議決定
・日本滞留宣教師を抑留所に強制収容
・大政翼賛会、第三回中央協力会議
▼10月
・陸軍、本土空襲の米機搭乗員を死刑、または重罪に処する旨布告
▼11月
・官庁の一部職権を統制会に委譲
▼12月
・竹槍訓練を開始
・御前会議、「大東戦争完遂のための対支処理根本方針」決定

東京堂出版）。翌年の単行本化の際に収録された河上徹太郎の「「近代の超克」結語」を読むと、このように評価が分かれる理由もある程度了解できようか。

此の会議が成功であつたか否か、私にはまだよく分らない。たゞこれが開戦一年の間の知的戦慄のうちに作られたものであることは、覆ふべくもない事実である。確かに我々知識人は、従来とても我々の知的活動の真の原動力として働いてゐた日本人の血と、それを今まで不様に体系づけてゐた西欧知性の相剋のために、個人的にも割り切れないでゐる。会議全体を支配する異様な混沌や決裂はそのためである。

「相剋」や「割り切れなさ」が、西洋文明対日本という単純な図式を描かせなかったとはいうものの、「知識人」も〈思想戦〉の空気とどう関わるかを問われていたのである。

他方では、日本語への関心が浮上している。発端は外地での日本語教育を念頭に置いた国語審議会による「標準漢字表」「新字音仮名遣表」の発表である。こうした、いわば国語の便宜化、簡易化への文学者からの応答の例として、亀井勝一郎「国語の危機」（「日本学藝新聞」九・一五）を挙げておこう。

文学者たるもの、深き決意をもつてこの課題に対しなければならない。（中略）現代語の乱脈は、文明開化以来のわが精神と思想の混乱のあらはれに他ならぬのである。（中略）皇国の伝統に照らして、俗化した一切の言語を、その本来の面目に還し、そこに流した祖先の血と悲願に身をもつて直入することである。（中略）言葉は国のいのちである。いかに困難なりともその尊厳を傷つけず、異邦人をして之に従はしめるだけの愛と自信をもたねばならぬ。

主眼は「美しい日本語を建設すること」という亀井自身の言葉に尽きるのであろうが、「文明開化以来のわが精神と思想の混乱」というように、言葉と思想が直結させられているところを見ると、ここにも〈思想戦〉の影は色濃いと言える。舟橋聖一なども、「これが南方進出に伴ふ、敵前上陸的国語の簡易化といふ技術論的便宜主義ならば大いによろしい。

【文化】

▼9月

・映画「母の地図」（島津保次郎監督）

▼10月

・映画「或る女」（渋谷実監督）

▼11月

・北原白秋没

・大東亜文学者会議

▼12月

・大東亜戦争美術展（藤田嗣治「十二月八日の真珠湾」など）

・映画「ハワイ・マレー沖海戦」（山本嘉次郎監督、特殊技術円谷英二）

・中島敦没

・大日本言論報国会結成

【代表作】

▼9月

・「近代の超克」特集（～10月、「文學界」）

・井伏鱒二「昭南日記」（「文學界」）

▼10月

・石上玄一郎「精神病学教室」（「中央

然しそのために、本国においても国語の伝統を無視するやうな、浅薄な合理派の理論が便乗するのは、堪へ難いことである」といい、こうした態度を「現下の最悪の思想」であると述べている（「近時所感」、「読売新聞」九・一〇）。端的に言えば、「標準漢字表」「新字音仮名遣表」問題が、一部の文学者に〈日本精神〉なるものの探求を触発したということになる。十一月の「愛国百人一首」の選定なども、こうした流れの中に位置づけられよう。

〈思想戦〉への文学の側からの働きかけとしては、中華民国、満州、朝鮮、台湾、モンゴルの文学者を招聘して開かれた〈大東亜文学者会議〉を外すことはできまい。五月に結成されたばかりの日本文学報国会の主催で企画され、十一月三日に帝国劇場にて第一回大会開会式が行われている。「大東亜文学者大会の意義」（「日本学藝新聞」一一・一）と題する一戸務の文章を引いておこう。

> 新聞紙上などで、この大会を目して東亜文藝の復興であるといつたやうな題目をつけてゐるが、私からいはせれば、決してこれは東亜文藝の復興ではなく、建設なのである。（中略）日本文化、支那文化、印度文化、その他東亜各地の文化は、それぞれの地域でそれぞれに独自の発達をしてゐる。それらが、東亜――東洋といふ、対西洋の文化と対比して、発達してくるのは、実に今後の新文化なのである。（中略）もちろん今回の大会が、大東亜戦争の目的完遂のために文学者が協力する一つの形であるが、しかし、これを更に大きくみて、敵性国家以外の国々が一塊となつて、新文化を建設する会議だとも解される。

島崎藤村が万歳三唱の音頭を取り、横光利一が「大会宣言」を朗読した。ほかに菊池寛、林房雄、春山行夫、金子光晴、高浜虚子、斎藤茂吉、佐々木信綱などが文学ジャンルを問わずに結集し、〈大東亜共栄圏〉を形作る国や地域の文学者と交流を深め、「大東亜文学賞」を制定するなどした。

さて、この時期を、太宰治は母危篤のため津軽に里帰りしたり、井伏鱒二の南方からの

公論」）
・太宰治「花火」（「文藝」）
・新美南吉『おぢいさんのランプ』（有光社）

▼11月
・丹羽文雄「海戦」（「中央公論」）
・中島敦『南島譚：新鋭文学選集2』（今日の問題社）
・太宰治『信天翁』（昭南書房）
・板垣直子『現代の文芸評論』（第一書房）
・杉山平助『文芸五十年史』（鱒書房）
・馬場孤蝶『明治文壇の人々』（三田文学出版部）

▼12月
・堤千代「十二月八日」（4日、「大阪毎日新聞」）
・太宰治「禁酒の心」（「現代文学」）
・川端康成「英霊の遺文」（8、10～15日、「東京新聞」）
・小宮豊隆『漱石の芸術』（岩波書店）
・吉田精一『芥川竜之介』（三省堂）

帰還を迎えたり、「黄村先生言行録」を執筆したりといったことに費やしているが、「文藝」十月号に発表した短編「花火」が全文削除処分に遭っている。（ただし、「文藝」が店頭に並んだ後に出た処分である）「出版警察報」第一四五号によれば、次のような理由であった。

「花火」ト題スル小説ハ登場人物悉ク異状性格ノ所有者ニシテ就中主人公タル「勝治」ト称スル一青年ハ親、兄弟ノ忠言ニ反抗シ、マルキストヲ友トシ、其他不良青年ヲ仲間ニ持チ、放縦、頽廃的ナ生活ヲ続ケ、為メニ家庭ヲ乱脈ニ導キ、遂ニ其青年ハ不慮ノ死ヲ遂ゲルト謂フ経緯ノ創作ナルガ全般的ニ考察シテ一般家庭人ニ対シ悪影響アルノミナラズ、不快感極マルノモノト認メラルルニ因リ第一一〇頁ヨリ第一二五頁迄削除。

当局はこう言うが、この作品を注意深く読めば、単に乱脈で退廃的な青年を描いただけの作品とはとうてい思えないはずである。

主人公勝治の父はフランス帰り、母はドイツ語学校主事の娘である。この欧州の二大国は、この時点での敗戦国と戦勝国としてもメディア上では表象されているが、これらが勝治のルーツに関わっている。勝治自身は放蕩の果てに死を遂げ、作品は妹が「兄さんが死んだので、私たちは幸福になりました」と述べて結ばれるが、これは「世界の文学にも、未だかつて出現したことがなかった程の新しい言葉」だという。目をひくのは、これが「エホバをさへ沈思させたにちがひない」と、一神教の神が持ち出されている点である。

妹の「言葉」の〈新しさ〉に対し、西洋の宗教と思想の根本である神が、いわば〈古い〉価値観の代表として現れている。ここには、〈思想戦〉を標榜する人々の〈日本対欧米〉という二元論と重なるようでいて、より複雑な〈欧米〉への思いがあるように見える。この点は検討されてよいはずである。作品は実際に起きた保険金殺人事件を題材としており、一見、「開戦一年の間の知的戦慄」（前出河上徹太郎）などとは無縁のような「花火」だが、太宰の時局へのまなざし、ひいては〈思想戦〉への態度も窺い得る作品のように思われる。